

刃物産地の生き残り戦略

— イギリス・シェフィールドとドイツ・ゾーリンゲンの事例 —

上野 恭裕・曾根 秀一

Survival Strategy of the Cutlery Centers:

A Case Study of Sheffield and Solingen

Yasuhiro UENO and Hidekazu SONE

Abstract

There are several famous cutlery producing areas in the world, namely Sheffield in England, Solingen in Germany, and Seki in Japan. Why could these areas become global cutlery centers? In this paper, we focus on geographical and historical factors to clarify the reasons. Solingen, for example, was already a cutlery production center in the 13th century, the existence of the Rhine being one of the major reasons behind this—the river connected it to the trading city of Cologne, and many products were exported to countries worldwide; Solingen also had access to hydraulic power, including tributaries, where craftsmen such as blacksmiths and polishers gathered. Sheffield too used hydraulic power, of the Don river, to produce cutlery. In all these areas, quality is maintained through the division of labor and unique mechanisms such as a trade association. In addition to cutlery, they have diversified into new products such as scissors, tableware, and cooking tools. In other words, they have developed through such entrepreneurship.

Keywords: cutlery industry, Sheffield, Solingen, inter-regional competition, international comparison, diversification strategy

要 旨

世界には有名な刃物産地がいくつかある。その中で、イギリスのシェフィールド、ドイツのゾーリンゲン、そして日本の岐阜県・関は世界三大刃物産地と呼ばれている。なぜ、これらの地域が世界的な刃物産地となりえたのか。本稿ではその理由を明らかにするために、地理的、歴史的要因を中心に論じる。例えばゾーリンゲンは13世紀にはすでに刃物の産地となっている。ゾーリンゲンが刃物産地となった大きな理由の一つがライン川存在である。ライン川を通じて、貿易都市ケルンに繋がり、多くの製品が世界各国に輸出された。また、支流も含めて水力を利用することができ、そこに鍛冶屋や研磨工などの職人が集まった。シェフィールドもドン川の水力を利用して刃物の産地となっている。これらの地域では、徹底した分業と同業組合などの独自の仕組みにより品質維持が図られている。また刃物に加えて、はさみや食器、調理器具などの新製品に多角化するという企業家精神により産地は発展してきた。

キーワード：刃物産業、シェフィールド、ゾーリンゲン、産地間競争、国際比較、多角化戦略

1. はじめに

世界には有名な刃物産地がいくつかある。そのなかで、イギリスのシェフィールド (Sheffield)、ドイツのゾーリンゲン (Solingen)、そして日本の岐阜県・関は世界三大刃物産地として知られている。もちろんそれ以外にも有名な刃物産地は数多く存在する。多くは産地として集積し、古くから発展してきた。それぞれの地域で成立の経緯も発展の歴史も、また得意とする製品も異なる。しかしながら、多くは人々の生活に密着した刃物という製品の特性上、各地域に古くから存在し、手作業で刃物を作っている中小の家内制手工業的な作業所が多い。

そのようななかで、世界三大刃物産地として知られるシェフィールド、ゾーリンゲン、関は比較的大規模な工場を持った企業を生み出し、世界的に貿易を展開し、大きく成長してきた。なぜこれらの地域の刃物業者は長期間存続し、時に大きく成長することができたのであろうか。

本稿は特にイギリスのシェフィールドとドイツのゾーリンゲンに注目し、これらの地域が世界的な刃物産地の中心となりえた理由を明らかにすることを目的とする。そのために今回は地理的、歴史的要因を中心に論じていく。地場産業が集積し、特定の地域に産地を形成することに、その地域の地理的条件と歴史的な経緯が深く影響を与えているからである。

例えばゾーリンゲンは13世紀にはすでに刃物の産地となっていた。ゾーリンゲンが刃物産地となった大きな理由の一つがライン川の存在である。ライン川を通じて、貿易都市ケルンに繋がり、多くの製品が世界各国に輸出された。また、支流も含めて水力を利用することができ、そこに鍛冶屋や研磨工などの職人が集まった。シェフィールドもドン川の水力を利用して刃物の産地となっている。

また地場産業はその地域の発展と深く関わっている。その地域の労働力をはじめとして、様々な資源を利用すると同時に、雇用を生み出し、その地域に需要を呼び込むことで、経済発展の基礎を築いている。地場産業と地域がお互いに相互依存関係を成立させているのである。地域に属する企業は地域内での学習を通じてイノベーションを起こす。そのイノベーションにより、さらなる起業が促進される。それと同時に、企業は伝統的な技術や伝統文化を維持し、継承する役割を担っているのである (上野、2007、p.13)。

刃物産地においても他の地場産業と同様に、徹底した分業と同業組合などの独自の仕組みによって、品質維持が図られてきた。また地域の様々な資源を利用して優れた刃物を生産すると同時に、企業家精神を発揮して、刃物に加えて、はさみや食器、調理器具などの

新製品に多角化することにより産地は発展してきた。

本稿では伝統的な刃物産地に注目し、なぜ伝統産地として存続しえたのか、その理由を探る。しかしながら、その実態についてはわが国ではほとんど明らかにされてこなかったのが実情である。実際、本研究を遂行するにあたり、わが国における先行研究はそれほど多くは存在しなかったため、ドイツ語、英語の文献を中心にまとめられた。また一部に著者らによる独自のフィールド調査も含まれている。本稿では文献から得られたシェフィールドとゾーリンゲンの地理的、歴史的な情報と、フィールド調査から得られた企業の情報をもとに分析を行う。

2. シェフィールドの刃物産地としての特徴

イギリスは日本人にとってなじみが深い国である。歴史的にもイギリスから多くを学び、様々な制度もイギリスの制度を模範として形成された。観光地としてもロンドンや湖水地方などは日本人に人気の地域であり、多くの日本人が訪れる。しかしながらシェフィールドという地域は日本人にとってあまり知られていない。刃物産地としてもゾーリンゲンに比べるとそれほど認知度が高いわけではない。日本でよく売られている洋食器のブランドとしてシェフィールドのデビッド・メラーがあげられるが、ストック・オン・トレントにある陶磁器ブランドのウェッジウッドの方が、イギリスのブランドとしては有名であろう。もっとも現在、ウェッジウッドはフィンランドのはさみメーカー、フィスカス（Fiskars）の傘下に入っている。ここでは刃物産地としてのシェフィールドの特徴を見てみよう。

2.1. シェフィールドの地理的特徴

シェフィールド（Sheffield）は、イングランドのヨークシャー・アンド・ザ・ハンバー地域（region）の都市州（county）の一つであるサウス・ヨークシャー（South Yorkshire）の中の4つの大都市区の一つで、サウス・ヨークシャーの南端に位置する工業都市である。2016年の人口は約57万人で、イングランドで3番目に大きな都市となっている。人口は産業革命の間に急速に増加した。19世紀初頭の人口は約6万人であったが、20世紀初頭までに約45万人に増加している。1951年には577,050人を記録している¹⁾。

1) Sheffield City Council の公式 Web サイト内、Sheffield's Population (<https://www.sheffield.gov.uk/home/your-city-council/population-in-sheffield>) 参照、2021年2月20日閲覧。

シェフィールドは地理的には、イングランドを南北に縦断するペナイン（Pennines）山脈の南にあるピークディストリクト国立公園の東に位置する。「ローマのような7つの丘のある街」（Fine, 2003, p.19）とも言われ、南北の交通移動は困難であった。また丘陵地帯の斜面をたがやすことも困難で、農業にはあまり適した土地ではなかったが、現在は道路網が発達し、イングランドの中心部に位置するという立地により、原料調達や人材供給の観点から、産業発展にとって有利な立地となっている。

シェフィールドの気候は典型的なイングランド北部の気候で、夏も20℃ぐらいまでしか気温は上がらず、過ごしやすい。冬は最低気温が2℃ぐらいまで下がり寒さは厳しい。降水量は平均的であり、これらの気候が産業に大きな影響を与えたということはないが、次に示す地形や地質が産業発展に大きく影響を及ぼした。

シェフィールドはドン（Don）川とその4つの支流、ロクスリー（Loxley）川、リベリン（Rivelin）川、ポーター（Porter）川、シーフ（Sheaf）川にかこまれていたため、水車による動力が得られたことや、十分ではないものの鉄鉱石と石炭、砥石の原料や粘土がシェフィールドとその近郊で産出したこと、またシェフィールド周辺に広がる森が鉄の製錬に必要な木炭の豊富な供給源となったことなどにより、早くから金属加工業が発達した（日本貿易振興会日本経済情報センター、1980、p.1）。

これらの石炭、鉄鋼石、砥石、粘土、また森林や水力などの天然資源はいずれもシェフィールド地域に固有のものではなく他の地域にも存在する。ただし、これらすべてを備えているということはシェフィールド固有の特徴であり、他の地域にそのような場所がそれほど多く存在するわけではなかった。この地域が産地として成長したのは、このような天然資源からなる様々な要因の組み合わせによるものと考えられるが、そのなかで最も重要な要因が水力と砥石の原料の供給であった。この地域の夾炭層の砂岩が砥石の原料として理想的であるとともに、シェフィールドの多くの河川の水力が利用可能であったことが大きい（Binfield and Hey, 1997, p.14）。

これらの天然資源がシェフィールドの刃物産業の発展を支えたといえるであろう。ただし、それは産業発展の必要条件ではあるが、十分条件ではなかった。シェフィールドが刃物産地として発展するためにはそれ以外の要因も必要となる。その要因がどのようにして得られていったかを、歴史を振り返ることにより確認しよう。

2.2. シェフィールドにおける刃物産業の発展

シェフィールドにおける刃物（カトラリー）産業²⁾の起源は約700年前の13世紀にまでさかのぼることができる。13世紀の終わりの1297年の納税申告書に、シェフィールドの刃物師の納税義務に関する記述がみられる（Binfield and Hey, 1997, p.12）。課税リストにシェフィールド（*Shefeld*）として記録された地域に、刃物師たちが小さな集落を形成していたようである（Moore, 1999, p.87）。14世紀には、すでにシェフィールドの刃物は高い評判を得ていたようであり、1340年に出版されたジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』にも、シェフィールド・ナイフの記述があることは広く知られている³⁾。

シェフィールド城で発掘された14世紀ごろのナイフは、腰の周りのベルトに取り付けられた鞘に納められ、主に食事の時のフォーク代わりに使われていたと思われる。シェフィールドの刃物師は18世紀にはいるまで、そのようなナイフを作っていたといわれている（Binfield and Hey, 1997, p.12）。

また1400年までには、一部の地元の農民が農業の副業として刃物師として働き、収入を補っていたという記録もあり、小川の流れを利用した動力砥石車が1489年までには操業を始めていたという記録が残っている⁴⁾。当時は農民が副業的に刃物を作り、農業収入を補っていたが、1500年代の後半には砥石車の数が14台ほどに増え、1637年にはシェフィールド周辺のドン川、ロクスリー川、リベリン川、ポーター川、シーフ川の谷で400～500人の刃物職人が働いていたといわれている（Krause and Putsch, 1994, p.106）。

16世紀半ば頃には、ハラムシャー（Hallamshire）⁵⁾の領主のシュルーズベリー伯爵のも

2) シェフィールドに関する多くの文献ではカトラリー（Cutlery）、カトラ（Cutler）という表現が用いられている。カトラリーとは、一般的にはスプーンやナイフ、フォークなどの食卓用の金属製品を意味するが、もともとは「切るもの」という意味であり、カトラは刃物師と訳すことができる。シェフィールドの製品群は食卓用金属製品が中心だが、ポケットナイフやかみそり、はさみなどの製品も含まれている。多くの文献でもカトラリーという言葉は多様な刃物製品を意味している。本稿では広く「刃物」「刃物産業」「刃物師」あるいは「カトラリー」と表記するが、必要に応じて他の用語も使用する。

3) 『カンタベリー物語』の第4話「家扶の話」の中で、粉屋についての次のような記述がある。「粉屋は孔雀のように高慢で派手な男でした。彼は笛を吹いたり、魚をとったり、網を繕ったり、木の盃を旋盤の上で回して作ったりするのが上手でした。それに、相撲をとったり狼をするのも上手でした。いつも革帯のところに長い大きなナイフを吊しておりました。刀の刃はとてもとがっておりました。ポケットの中には恰好の良い短剣をしのばせておりました。危険をおそれ誰も彼にさわろうとするものはありません。長靴下の中にシェフィールド製の大きなナイフを入れておりました。」（G. チョーサー著、梶井迫夫訳『完訳カンタベリー物語（上）』（改訂版）岩波文庫、1995年、p.176）。シェフィールドの刃物に対する当時の評価がうかがえる。

4) Sheffield City Councilの公式Webサイト内のA Short History of Sheffield (<https://www.sheffield.gov.uk/home/libraries-archives/access-archives-local-studies-library/research-guides/history-sheffield>) 参照、2021年2月20日閲覧。

5) ハラムシャー（Hallamshire）はシェフィールド周辺地域の旧名称である。

と、領主裁判所により刃物業者の商標の登録、見習い工の管理、労働慣行や取引の管理などが行われていた。1569年には領主裁判所によって61個のトレードマークが登録されている (Binfield and Hey, 1997, p.15)。このようなシュルーズベリー伯爵の政策によって16世紀後半には、シェフィールドで作られる刃物の品質は向上していった。

この時期のシェフィールドの刃物師は小規模な事業体で、鍛冶屋的な存在であり、貿易の拡大は、大規模な事業所の創設によるのではなく、小規模な事業所の増加によって達成されていた。これに対してロンドンの刃物師組合は12世紀にはすでに設立されており、1285年にはホールも所有するほど成長していた。また1416年と1607年には国王の勅許状を取得し、貿易を拡大していった (Binfield and Hey, 1997, p.18)。

しかしながら、16世紀の後半にはシェフィールドの刃物が数々の文学作品に登場するほど、シェフィールドの刃物の品質は向上し (Binfield and Hey, 1997, p.16.)、17世紀から18世紀にかけて、シェフィールドのカトラリー業界は急速に成長し、ロンドンのカトラリー業界を追い抜き、英国のカトラリー生産の中心地となった (Binfield and Hey, 1997, p.1)。これを支えたのがシェフィールドの刃物師組合 (The Company of Cutlers in Hallamshire) である。次節でこの刃物師組合について詳しく見てみよう。

2.3. シェフィールドの刃物師組合

17世紀のヨーロッパは世界貿易の拡大期であった。1602年に世界で初めての株式会社と言われているオランダ東インド会社が設立されている。イギリスでも1600年にイギリス東インド会社が設立され、アジアとの貿易が盛んに行われるようになる。シェフィールドの刃物師組合が設立されたのもそのような時代である。

17世紀に入り、シェフィールド地域の状況に大きな変化が生じた。シュルーズベリー伯爵の7代伯ギルバートが1616年に亡くなり、領地はシェフィールドの刃物産業の維持にほとんど関心のない領主の手に渡った。それに対応して、1624年に議会の立法措置により、ハラムシャーにギルド組織であるハラムシャー刃物師組合 (The Company of Cutlers in Hallamshire、以下刃物師組合と表記) が設立されたのである。

この刃物師組合では見習い工の管理を行い、選挙権を持つ公民 (freeman) を選出した。また、刃物師の商標を登録し、この地で生産されるカトラリーの品質を管理した⁶⁾。刃物師

6) History of the Cutlery Industry (<http://www.sheffieldcutlerymap.org.uk/history-of-the-cutlery-industry/>) 参照、2021年2月20日閲覧。

組合は1624年の法律により、ハラムシャーに居住し、金属製のナイフ、刃、はさみ、剪定鋏、鎌、カトラリー、その他すべての製品を製造する業者を管理する権限が与えられたのである。また、同法によって、この刃物師組合の組織は、毎年8月に、マスター・カトラリー（Master Cutler：刃物師の親方・棟梁⁷⁾）、2人のワーデン（Warden：管理者）、6人のサーチャー（Searcher：検査官）、24人のアシスタント（Assistant：補佐役）を選出し、これらのメンバーで構成される必要があると規定されている。基本的には毎年新たなマスター・カトラリーが選ばれる。ワーデンとサーチャーは次期マスター・カトラリー候補であり、マスター・カトラリーを退任するとアシスタントになることが多いようである（Binfield and Hey, 1997, p.6）。

1624年の最初のマスター・カトラリーは、地元の有名な刃物師のロバート・ソルスビー（Robert Sorsbie or Sorsby）という人物であり、19世紀半ばまでは、マスター・カトラリーの大部分は、法律で定められた商品の製造に関与した刃物師であった⁸⁾。

しかしながら、1814年にはこの刃物師組合は多くの権限を失い、これ以降は刃物師の商標管理のみを許可されている⁹⁾。こうして、この団体の主要な目的はシェフィールド・ブランドの維持となった。

一方でこの組合はシェフィールドの刃物業界だけでなく、地域経済にも重要な役割を果たすようになる。1843年にシェフィールド市が自治区として創設されるまで、町の行政は町の評議員、教会、刃物師組合が担っていたが、1832年の議会選挙ではマスター・カトラリーが選挙管理委員を務めている（Binfield and Hey, 1997, p.2）。それ以降、市長や議員がマスター・カトラリーを務めたり、マスター・カトラリーが市長になったり、地方政治とのつながりが深い（Binfield and Hey, 1997, p.6）。

当初、職人のギルド的な組織であった刃物師組合は、19世紀半ば以降、鉄鋼業界の商人の商標の管理機関になり、シェフィールドの企業家の代表機関となっていくのである（Putsch and Krause, 2018, p.97）。

前述のように、19世紀以降、刃物師組合の権限が規制され、組合の目的はシェフィール

7) マスターをそのまま訳すと親方となるが、刃物師組合のマスター・カトラリーの性格は、時代とともに変化している。またアシスタントも単なる助手ではなく、マスター・カトラリー経験者の顧問的な役割へと変化しているようである。

8) The Company of Cutlers in Hallamshireの公式Webサイト内、The Master Cutler, 2020-2021 (<https://cutlers-hallamshire.org.uk/the-master-cutler-2020-2021/>) 参照、2021年2月20日閲覧。

9) History of the Cutlery Industry (<http://www.sheffieldcutlerymap.org.uk/history-of-the-cutlery-industry/>) 参照、2021年2月20日閲覧。

ド産の刃物ブランドの保護、シェフィールド産の刃物の宣伝が中心となったが、2018-2019のAnnual Reviewには今日の刃物師組合の目的が、「製造業、特にシェフィールド市の地域の製造業の利益を支援し促進すること」であると示され、刃物産業の振興にとどまらず、広く地域産業の振興を目指していることが分かる¹⁰⁾。

また同時に次のような活動を行うとも記されている。

- a. 市民の義務を果たし企業団体を代表し地域内で政治的な影響力を行使する。
- b. 全国で、特にロンドンにおいてこの地域を宣伝する。
- c. 都市地域内の教育と技能開発をサポートする。
- d. ローカルチャリティーをサポートする。
- e. ホールとそのコレクションを保存する。

このようにこの刃物師組合は単に業界団体として存在し業界の利益を追求するだけでなく、地域経済、地域政治と深く結びつき、地域の発展に大きく貢献してきた(Moore, 1999, p.223)

例えば、18世紀には地域を流れるドン川の運河整備事業に関わり、ドン川の航行可能性を増強し、地域の輸送コストを大幅に削減している。また1638年にはカトラーズ・ホールが建設されている。1725年には第2のカトラーズ・ホールが建設され、1832年に改築されより豪華な建物となった。さらに1867年と1888年に拡張工事がなされ今日に至っている。このホールは刃物産業と刃物師組合の繁栄の象徴となり、刃物師組合の行事だけでなく、広く地域社会のイベントで利用されている(Binfield and Hey, 1997, pp.115-161)。

18世紀から19世紀にかけて、シェフィールドの産業が変化するにつれて、組合の活動も変化した。この地域の産業とビジネスを支援し、人々のために活動を続けている。今日、刃物師組合は、地元の製造業と企業のサポートを行い、シェフィールドの企業家にとって、ネットワークを確立するための大きな基盤となっている。例えば、様々なイベントやフォーラムを開催し、表彰を行って地域の発展に貢献している。刃物師組合は、シェフィールドを商業的、政治的、社会的に影響のある近代的な工業都市にすることに大きく貢献した。また、さまざまなチャリティー活動も実施し、毎年2,000人もの人がチャリティーの成果の恩恵を受けている¹¹⁾。

このように刃物師組合は、ほぼ400年間、シェフィールドで製造されたカトラリーおよび

10) The Company of Cutlers in HallamshireのAnnual Review, 2018-2019参照。

11) The Company of Cutlers in Hallamshireの公式Webサイト内、The Master Cutler, 2020-2021 (<https://cutlers-hallamshire.org.uk/the-master-cutler-2020-2021/>)参照、2021年2月20日閲覧。

鉄鋼製品の品質を維持し、金属関連産業の地位を国内外で維持するのに貢献してきたし、それは今日でも継続されている¹²⁾。

2.4. シェフィールドにおけるイノベーション

産業発展に大きな影響を与えたもう一つの要因がイノベーションである。17・18世紀におけるイギリスの鋼製造の基本的な技術は滲炭法（cementation process）と言われるものであった。これは、炭素の吸収具合が均一でなく、品質において問題があった。これを解決したのが1740年頃にドンカスターからシェフィールドに移住してきた時計職人のベンジャミン・ハンツマン（Benjamin Huntsman）である。彼は1742年に原料を耐火性の「るつぽ」の中に入れて鑄鋼をつくる方法である「るつぽ法」を発明した。この方法で作られた鋼は、時計のぜんまいや高級刃物に用いられ、シェフィールド製品の品質向上に貢献した。（熊澤、2002、p.274; Moore, 1999, p.223）。もっとも、発明当初はこの製法で作られた鋼は固すぎて研磨が難しく、シェフィールドの刃物職人には売れなかったとも伝わっている。

同じころ、シェフィールドの金工トマス・ボウルゾーバーが（Thomas Bolsover）が熱融解による銀メッキ法を発明し、シェフィールド・プレートと呼ばれる銀メッキ銅製品が生産されるようになり、銀メッキの食器の製造という新しい産業分野が誕生した（Putsch and Krause, 2018, p.96）。

イノベーションの最後に、ボルトン・アンド・ワット社（Boulton & Watt）について触れておこう。ボルトン・アンド・ワット社はマシュー・ボルトン（Matthew Boulton）とジェームズ・ワット（James Watt）のパートナーシップ（共同事業体）として創始された会社である。同社によってイングランド・バーミンガムで開発された蒸気動力機関が、ゾーリングゲンよりもはやく、1786年にシェフィールドに設置され、動力として用いられている（Putsch and Krause, 2018, p.97）。

これらのイノベーションにより、18世紀から19世紀にかけてシェフィールドでは軽工業の刃物産業と重工業の鉄鋼業がともに発展していくのだが、20世紀には、アメリカとドイツの企業に遅れをとることになる。

12) History of the Cutlery Industry (<http://www.sheffieldcutlerymap.org.uk/history-of-the-cutlery-industry/>) 参照、2021年2月20日閲覧。

2.5. シェフィールドの刃物産業の衰退

18世紀から19世紀にかけて、シェフィールドの刃物産業は世界において中心的な地位を占めていた。1850年から1920年の間には、刃物製造に約15,000人の従業員が関わっていたといわれている (Putsch and Krause, 2018, p. 95.)。

世界的な貿易も盛んに行われ、1810年にはシェフィールドのカトラリー製品の半分が米国に輸出されていた (Putsch and Krause, 2018, p. 96)。産業革命以降、多くのイノベーションを起こしながらも、立地上の不利も影響し、シェフィールドにおいて企業規模は拡大しなかった。しかしながら高級品へ特化することにより地域全体としては発展してきたのである。ただしそれは下請組織を利用した低賃金労働者層により支えられていたということは忘れてはならない。多くの労働者は過酷な労働条件のもとで働き、貧困な生活を送っていた (熊澤、2002、p.275)。刃物産業にたずさわる労働者が過酷な生活を送っていた様子は、多くの文献からうかがえる。

例えば有名な刃物師のスタン・ショー (Stan Shaw) を紹介している文献には、19世紀において、刃物師と管理者は別の世界の住人であり、伝統的に刃物師の仕事が高く評価されることもなく、多くの刃物師が低賃金に苦しめられていたことが記されている (Tweedale, 1993, p.89)。20世紀になってもそのような状況は変わっておらず、スタン・ショー自身もコンピューターを使う仕事をしている妻の方が高収入であったと述べている (Tweedale, 1993, p.89)。

20世紀に入り英国の多くの産業の衰退と同じように、シェフィールドの刃物産業も衰退していった。現在、刃物産業に携わる者は200人から300人とも言われており、有名なシェフィールドの刃物工場の多くが閉鎖されている。現在も残っている企業、工場はわずかであり、もはやシェフィールドの主要産業とはなっていない (Putsch and Krause, 2018, pp.95-96)。

19世紀末までの世界市場における覇権をほしいままにしたイギリスは、官僚制により成長したアメリカやドイツの巨大独占資本との競争に敗れ、衰退していった。チャンドラー (A. D. Chandler) はイギリスを同族経営が支配的な個人資本主義 (personal capitalism) とし、アメリカにおける所有と経営が分離した経営者企業が支配的な競争的経営者資本主義 (competitive managerial capitalism) と、またドイツにおける協調的経営者資本主義 (co-operative managerial capitalism) と対比させている (Chandler, 1990参照)。市場原理に対して官僚制組織を備えた経営者能力が優勢となり、市場の「見えざる手 (invisible hand)」が経営者の「見える手 (visible hand)」へと置き換えられていったのである。

そのような流れの中、伝統的なシェフィールドの刃物企業も姿を消していった。1839年に創業されたリチャードソン（Richardson Sheffield LTD）は、世界最大のキッチンナイフメーカーの1つであった。リチャードソンは低価格の大量生産の製品に特化し、1980年代半ばには、60%を超える輸出シェアを持っていた。しかしながら、海外との激しい競争に耐えることができず、2007年に破綻し、オランダの企業にブランドが引き継がれている（Putsch and Krause, 2018）。

一方で、高品質の製品に特化している企業の1つであるデビッド・メラー（David Mellor）は、健全経営を続けている。同社の創業者のデビッド・メラーは、1950年代に銀食器メーカーで銀細工職人として働いていたが、デザイン学校でデザインを学び、自ら事業を起こした。イギリスで最も有名なデザイナーの一人と言われ、彼が60年代に手掛けた信号機は現在でも使われている。デビッド・メラーのカトラリーは数々のデザイン賞を受賞し、世界的に高い評価を受けている。1990年にシェフィールドからピーク国立公園のダービシャー、ハザーセージに移転し、未来的な円形のカトラリー工場を建造し、小規模ながらデザイン志向の製品で、市場で高い評価を受けている。また息子で後継者のコリン・メラーがデザインした高級家庭用ナイフも販売しており、持続的に事業を展開している。

このように「19世紀末以降のシェフィールドの鉄鋼業は、ヴィッカーズを代表とするような大規模な軍需産業と、中小規模の高級品生産へと特化した同族企業への二極化を鮮明にする」（熊澤、2002、p.276）ことになったが、軽工業の刃物産業内部でも大量生産を志向した企業と高級品生産を志向した企業へと二極化していったのである。そのうち、大量生産を志向した企業は競争に敗れ、高級品を志向した企業はかろうじて生き残っている。次に、そのような伝統的な製法を守り、高級品志向で生産を続けている企業を紹介しよう。

2.6. シェフィールド刃物企業の生き残り戦略¹³⁾

シェフィールドを代表する企業に1902年に創業された老舗ハサミメーカーのアーネスト・ライト（Ernest Wright）がある。同社は今もなお、熟練の職人がハンドメイドでイギリスの伝統的な高級ハサミを製作している。

同社の創業家であるライト家は、少なくとも1800年代からはさみの製造にかかわってき

13) この節はアーネスト・ライト社のホームページ Ernest Wright (<https://www.ernestwright.co.uk/> 2021年2月20日閲覧)、ならびに新しいオーナーのポール・ジェイコブスとのメールでのやり取り、またポールから情報を得たメルセデスベンツ社の商品紹介のホームページ Mercedes Benz (<https://www.myvan.com/en/craft-and-makers-en/mercedes-benz-sprinter-handcrafted-scissors/> 2021年2月20日閲覧)を参考にしている。

た。創業者の父であるウォルター・ライト (Walter Wright) はシェフィールドの有名な「リトル・マスター (刃物職人)」であり、はさみの刃の仕上げを専門としていた。ウォルター・ライトの息子であるアーネスト・ライト (Ernest Wright) が、1902年に会社を設立し、子供のアーネスト・ライト・ジュニア (Ernest Wright Junior) とその息子のグラハム (Graham) とフィリップ (Philip) らにより家業として営まれていた。

第二次世界大戦時、同社は大企業との合併を避けるために手術器具を製造するなど多角化を展開し、存続を続けた。終戦までにカトラリーの需要が高まり、戦後の1950年代から1970年代まで、同社は繁栄を続けた。

1954年に売り出され、ブランド登録されたキッチンはさみの Kutrite は競合他社と一線を画するユニークなものであった。同社は内部成長と買収により、イギリスで最大のはさみメーカーへと成長し、1970年代には80人以上の労働者を雇用し、45か国に輸出していた。75周年の年にアーネスト・ライト・ジュニアは引退し、息子のグラハムとフィリップが引き継いだ。

グラハムとフィリップが会社を引き継いだ頃、グローバリゼーションの波が押し寄せ、顧客をアジアの企業に奪われていった。使い捨てが流行になり、伝統的な高級はさみの需要は減少した。同社は1980年代の不況を乗り越えられず、1989年に一度清算されている。経営危機に陥ったのは同社だけではなく、シェフィールドにあった約70のはさみ製造会社も、1990年にはわずか2社となっていた。2008年、フィリップの息子であり第5世代のニック・ライト (Nick Wright) が企業の再建に努力し、2010年には、ライト家の管理下で市内中心部に再建された。しかしながら2018年に不幸にもニックが早くに亡くなり、同社はライト家の手を離れた。

現在、同社は家族経営のビジネスではないが、オランダ人の新しいオーナーが同社を存続させることに取り組んでいる。新しいオーナーのポール・ジェイコブス (Paul Jacobs) とヤン・バート・ファノイ (Jan Bart Fanoy) は、同社の技術が途絶えるのを憂慮し、2018年に同社を買収した。その目的は、優れたブランド、製品、技術の維持であり、彼らはすぐに熟練工と従業員を再雇用し、高品質のはさみの製造を再開し、かつての同社の看板製品であったキッチンはさみの Kutrite の復刻に取り組んだ。

当初は二人のオランダ人に対して懐疑的であった従業員も、製品に対する二人の熱意と労働条件の改善策などにより、経営者として受け入れていったという。ポールは使い捨て社会から持続可能な社会への移行を次のように主張している。「何度も何度も購入したいのですか、それとも手作りで一生続くものをご購入したいのですか」(メルセデスベンツのホー

ムページで紹介された記事より)¹⁴⁾と。同社の取り組みは、伝統的な製品や技術の博物館的な保存ではなく、実用品としての製品の復活であり、今後の刃物産業の将来の方向性を示しているといえる。

アーネスト・ライトが第二次世界大戦後に手術器具に多角化して生き残ったのと同じく、医療用刃物に多角化し、発展した企業がある。伝統的な剃刀メーカーであるスワン・モートン（Swann-Morton）である。同社は事業を多角化展開し、医療用刃物・外科用メスのメーカーとして生き残っている。ウォルター・スワン（Walter Swann）により1932年に剃刀のメーカーとして設立された同社は、1950年代に主要製品を剃刀から外科用のメスに切り替え、研究開発志向を持ち、高い技術力で成功を収めている。1964年には同社は公益信託財団に転換され、その50%は従業員によって所有されている。現在、同社は医療用刃物の世界的リーダーの1つとなっている¹⁵⁾。

3. ゴーリングンの刃物産地としての特徴¹⁶⁾

中世から刃物作りで名声を誇るゾーリングン（Solingen）は、マイスター（Meister）制度の象徴でもあったが、近年では機械化された工場が主流となっている。ハサミやカミソリなどの理髪用品、手術用ナイフなども製造し、様々な用途の製品を展開している¹⁷⁾。日本でもゾーリングンの包丁やカミソリは昔から知られており、包丁や料理はさみの「ヘンケルス」ブランドは日本での認知度も高い。ヘンケルスはゾーリングンに本社があるツヴィリング J. A. ヘンケルス（Zwilling J. A. Henckels AG）のブランドであり、双子マークの「ツヴィリング」ブランドも保有している。ここではゾーリングンの地理的・歴史的特徴を

14) Mercedes Benz (<https://www.myvan.com/en/craft-and-makers-en/mercedes-benz-sprinter-handcrafted-scissors/> 2021年2月20日閲覧)

15) Swann-Morton 公式 Web サイト (<https://www.swann-morton.com/> 2021年2月20日閲覧)、Putsch and Krause, 2018, p.107。

16) 本稿執筆のもととして、筆者の一人である曾根は、ロベルト・ヘアダー（Robert Herder GmbH）社 社長のギーゼルハイド・ヘアダー（Giselheid Herder）氏、職人の方々へのインタビューを2016年11月22日、24日に同社本社および工場内で行った。また、フランツ・ギュエデ（Franz Güde GmbH）社 社長のカール・ペーター・ボーン（Karl-Peter Born）氏へのインタビューは、2016年11月22日に同社本社で行われた。上野もまた2019年3月14日にフランツ・ギュエデ（Franz Güde GmbH）社を訪問し、社長のカール・ペーター・ボーン（Karl-Peter Born）氏にインタビューを行った。その前後においてもメールや手紙等で複数回にわたり補足の情報交換、質疑応答を行った。

17) 1970年代、約300の鍛冶屋があり、手術用のナイフなどの医療器具をつくる会社も存在したが、今では20とも指摘される（ロベルト・ヘアダー社、ギーゼルハイド・ヘアダー氏）。同地において、優れた高級ナイフや刃物の製造で知られる代表的な企業として、ロベルト・ヘアダー社（創業1872年）に加え、フランツ・ギュエデ社（創業1910年）やツヴィリング J. A. ヘンケルス社（創業1731年）などがあげられる。

見てみよう。

3.1. ゴーリンゲンの地理的特徴

ゴーリンゲンは、ドイツ北西部のノルトライン＝ヴェストファーレン州 (Land Nordrhein-Westfalen) に属する都市の1つであり、人口は約16万人である (2020年9月現在)。ヴッパー (Wupper) 川沿いに位置し、約15 km から20km の範囲内に南にレーヴァークーゼン (Leverkusen)、北西にデュッセルドルフ (Dusseldorf)、北東にヴッパータール (Wuppertal) が位置している。ゴーリンゲンを論じる際に、地政学的な優位性についても触れておきたい。同地は、ヴッパー川沿いに位置し、また貿易都市ケルンへのアクセスは、ライン (Rhein) 川のおかげで世界への玄関口となっていた。ここには繁栄につながるビジネスに必要なものが多く見受けられる。

ゴーリンゲンの刃物産業の発展に寄与した重要な要因の一つはベルギッシュ (Bergisch) 地域での豊富な水力であった。ヴッパー川とその副流により、水車の駆動を可能とし、その水の力は14世紀から砥石を駆動するために使用され、後に鍛冶屋が鋼を鍛造するためにも使用されてきたのである。この地域の森林の豊富さは、ベルギッシュ地域の芝生の鉄鉱石の堆積物を溶かし、鍛冶屋を運営するため使用される木炭の生産を可能にした。ヴッパー川は、研磨石を動かすための水力を提供し、森はこの地と近くのジーガーラント (Siegerland) から鉄石を精錬するための炭を提供したのである。このため、職人は主に家の隣にある小さな作業場 (コッテン) で働いた¹⁸⁾。

この土地に多くの鍛冶屋や研磨店が定住した理由は、大別して2点あげられる。第1に、研磨工用の工房の建設に適した理想的な多数の川や小川があったことである¹⁹⁾。第2に、貿易都市として栄えたケルンが近くにあることも決定的であった。

通称だった「Klingenstadt (刃物の街)」は、2012年から Solingen の正式名称となり、法的に保護されている原産地名でもある。1938年以来、法律によって保護されている。いわゆるゴーリンゲン条例では、「ゴーリンゲン工業地域内で製造および完成した製品のみが、その名を示すことができる」と規定している。

さらには、原材料と加工後のこれらの製品が、特定の目的に適している必要がある。例

18) コッテンという作業場は当時の生産施設であり、小さな鍛造所であり、時にはゴーリンゲン全体で最大100軒になったという (<https://www.vergleich-aktuell.de/solinger-messer-geschichte-hersteller/> 2021年1月10日閲覧)。多くの場合、コッテンの一部を所有もしくは、彼ら自身で職場を借りていた。ゴーリンゲン地域には、そのような商業集落が多数あり、ほとんどが互いに顔が見える範囲内であった。

19) とくに研磨工は川の近くであることが重要であった。彼らは水力を使って砥石を動かしていた。

えば、ナイフは独自の品質基準を十分に満たしているかどうかである。今日でも「Made in Solingen」は、ナイフと剣の品質の印でもある。市内中心部には、剣の抽象的な形の案内板が市街のどこにでもみられる。以下では同地における歴史的背景について論じていこう。

3.2. ゴーリングンの刃物産地としての起源と歴史的背景

ドイツにおける刃物およびカトラリー産業の起源は主にゾーリングンにある。この刃物づくりの始まりは西暦1250年頃までさかのぼり、市自体は1374年に設立され、自治体としての権利を獲得していった²⁰⁾。多くの研磨工や鍛冶師、剣士らが、ゾーリングンという好立地に集まり、剣やナイフといった武器を中心に製造が行われた。武器はドイツ経済の伝統的な産業であり、ゾーリングンは世界的にもその名を残してきた。

15世紀になると、研磨工などには特権が与えられ、ギルドを形成することができた。そして、16世紀には、刃物を生業とした家々がこの地域に定住するようになった。刀鍛冶と刃物メーカーに続いて、はさみメーカーもゾーリングンに居を構えた。特にゾーリングン製の剣は、中央ヨーロッパの支配者層に高く評価された²¹⁾。

17世紀末からゾーリングンにおいてもカトラリー（金属製食器）が製造されるようになる。当初はテーブルナイフとフォークが中心であったが、18世紀末には、ゾーリングンを拠点に400人のナイフ師と300人のはさみの鍛冶屋がすでに存在し、水辺の小さなコッテンで働いていた。その結果として、刃物の製造が19世紀までゾーリングンの経済を支配していたのである。

ゾーリングンの刃物生産は、厳格な分業により特徴づけられていた。例えば、鍛冶屋は鋼を形作り、研磨工はそれを研ぎ、組み立て工が部品を組み立てた。また、ゾーリングン地区全体は、同時代の人々から一種の「工場」として理解されていた。生産者は小さな作業場で働き、作業場から半製品を出荷した（Krause and Putsch, 1994, p.47）。それを配達したのがいわゆる「配達的女性」（Lewerfrauen = Lieferfrauen）であり、部門間（自営業の職人間）の半製品輸送を担当した。彼女らは配達用カゴを用い、頭に約20～30kgの荷物をのせてヴァッパーの山々の石や泥だらけの小道を通り、その荷物を運んだ。

ヴァッパーのコッテンからゾーリングンのメーカーまでの距離は、10kmを超えることも

20) 文献によっては諸説あり、14世紀との指摘もあるが、いずれにしても600年以上の歴史をもつものである。このようにみると、ゾーリングン地域での刃物の生産は、都市自体よりもさらに古い。製作は1850年頃まで手作業中心に行われていた。

21) <https://messervertrieb-rottner.de/wissenswertes/geschichte-der-klingenstadt-solingen/>（2021年1月11日閲覧）

少なくなかった。配達する女性は通常、この業界の職人家族出身の人々で、その多くは亡くなった研磨工の未亡人たちであった。というのも研磨を行う作業環境は劣悪であり、肺炎病から多くの研磨工の平均寿命は35歳に達しなかったからである²²⁾。

3.3. 国際競争におけるゾーリンゲンの生き残り戦略

こうした厳しい労働環境下にあったゾーリンゲンであるが、その名声は高まっていった。しかし、ヨーロッパ内やアメリカでの市場を巡って産地間競争も発生した。それがイギリスの代表的な刃物産地であるシェフィールドとの競争である。

当時、唯一の競争相手であったシェフィールドから利益を保護するため、1887年ドイツからの輸出品に「ドイツ製」の追加のラベルを付ける必要があった²³⁾。さらには大量生産への対応にも注力した。19世紀半ば頃から、ゾーリンゲンの刃物産業では機械化が進められた。蒸気機関を使った巨大なドロップ鍛造装置による製造により生産量が飛躍的に増加した。1861年にはゾーリンゲンの企業がベルリンから初期のスチームハンマーを入手し、1873年にはキーザーリンク (Kieserling) 社も、さらなる鍛造プロセスの機械化のために、これを導入した。また、ヘンケルス社が剣の刃の上部を金型のベルトドロップハンマーで打つ方式に切り替えた後は、ゾーリンゲンでもその技術が飛躍的に伸び、大量生産が進んだ。ドロップ鍛造は閉ざされた手工業的な製造環境から分離され、大量生産を実現させた。

ゾーリンゲンでは、原料を仕入れ、半製品から製造したため、カトラリー産業における生産の中心はゾーリンゲンであった。実際に1860年から1886年の間に、今日のゾーリンゲン工業地帯には273にも上る工場が設立された (Krause and Putsch, 1994, p.47)。

このため、蒸気機関の需要が高まり、水力による生産は衰退したが、部分的には従来の生産システムは維持された。個々の研磨工は新たな生産システムでも必要とされ、多くの稼ぎを得た²⁴⁾。そこでは、刃物の刃を粗く鍛造し、鋼を形作り、さらにそれを加工するために加工屋に渡すという徹底した分業が引き続き行われた。その後の作業も刃先へのより細かな処理は、職人の作業場であるコッテンで行われた。「ゾーリンゲン製造所」としても知られるこの生産システムは、小規模生産による柔軟で多様な製造パターンを可能とし²⁵⁾、世

22) https://www.capital.de/wirtschaft-politik/die-scharfmacher?article_onepage=true (2020年12月28日閲覧)

23) 中には品質の劣るものもあった。

24) 1914年当時の状況を指す。https://www.capital.de/wirtschaft-politik/die-scharfmacher?article_onepage=true (2020年12月28日閲覧)

25) 例えば、1860年から1880年の間に、手鍛造のプロセスが機械化され、「シュレーゲライエン」とも呼ばれる打ち方の鍛造は、高度な工業化段階におけるゾーリンゲンの産業開発の経済的基盤でもあった。1867年に Ohligs で鉄道

界中からの様々な要求に応えることができたのである²⁶⁾。

その結果、1900年頃、ゾーリンゲンの刃物はイギリスのシェフィールドとの競争に打ち勝ち、世界市場のリーダーとなった。その後、ゾーリンゲンでは、1903年にカトラリー業界の273の工場で9,000人の工場労働者と1,200人の女性の工場労働者が雇用された。うち100人以上の従業員を抱える19の工場がすでにあり、計4,556人がこれらの大企業で働いていた。1907年には、18,000人の刃物生産者が活動し、そのうち研磨工の割合は依然として最大であった（Krause and Putsch, 1994, p.47）。

その後、2度の世界大戦は、ゾーリンゲンの発展にも暗い影を落とすことになる。第一次世界大戦（1914～1918年）では、高品質な刃物が必要とされなかったため、ゾーリンゲンにおける刃物業界の興隆が中断された。さらに、第二次世界大戦（1939～1945年）では、ゾーリンゲンの街中も空襲で大きな被害を受けた。工場の多くが焼失し、これと同時に、機械、工具、カタログ資料、サンプルの多くを失うこととなった²⁷⁾。

3.4. 戦後から現代にかけての諸問題

第二次世界大戦後、ドイツ国内をはじめ、ゾーリンゲンにおいても構造変化が生じ、企業は自動化または専門化を余儀なくされた。主に高品質、新技術、マーケティングの追求により、いくつかの大企業と多くの中小企業は生き残ってきた。しかしながらその後の経済危機、アジアとの競争の激化がゾーリンゲンの成長を遅らせた。また、交通が発展したことにより、近世にみられた地理的な優位性や重要性も損なわれている。そして、小規模な生産方法への固執は、機械化をより困難にし、そのことが不利な要因にも繋がったとの指摘もある。このため、1960年にはドイツのカトラリーのほぼ90%がゾーリンゲンで製造されていたが、1986年には37%まで落ち込んだ（Krause and Putsch, 1994, p.71）²⁸⁾。

しかしながら、ゾーリンゲンは、生き残りをかけて、様々な対応を行ってきたことも指

が開通して以来、蒸気エンジンの動力は送電システムの助けを借りて使用が可能となった。このことで、水力に依存することなく、市内全体に工場の建設がなされた。

26) 在宅の商売で独立し、高収入を得ていたのは熟練したゾーリンゲンの研削家たちであった。労働組合協会を通じて、高い賃金水準を確保する方法を知っていたのである。1895年にゾーリンゲンに107の蒸気研削機械店があり、1910年以降徐々に減少傾向に向かっていった（<http://www.schneidwaren-solingen.de/geschichte/Page1.htm?uid=210532317> 2021年1月10日閲覧）。

27) <https://www.boker.de/geschichte> (2020年12月28日閲覧)

28) 剣の生産も同様であり、1960年以降劇的に減少する。252社中、1980年代の終わりに残ったのは61社のみ、20人以上を雇用していた。

摘できよう²⁹⁾。ゾーリンゲン条例は1995年以来、地元の刃物を保護してきた³⁰⁾。「Made in Solingen」の運動はその一環である。商工会議所によると、市内の古い工業地帯において、製造を行っている企業は現在約150存在する³¹⁾。

また、深刻な職人不足の問題への対応も迫られた。1960年代後半までは、ナイフのグリップを作る職人、研磨の職人など、それぞれが職業として成り立ち、彼らを3年半かけて育成するというマイスター制度が確立していた。しかし1969年にこの制度は廃止された³²⁾。その結果、鍛冶屋という仕事自体が職業訓練のプログラムからなくなってしまったのである³³⁾。

このプログラムがあった時代は、徒弟として入り、親方になるまでの決まった工程があったが、その一連の流れがなくなってしまったため、職人の供給がストップしてしまったのである。このことは技能の伝承も含め、ゾーリンゲン全体の深刻な問題でもあった³⁴⁾。

そこで、ヘアダー氏は、残っていた2人の金属研磨のマイスターとともに、プログラムを復活させるため、商工会議所とも交渉し、習得に3年半かかったものを2年間で習得できるようにプログラムを再構築したのである³⁵⁾。それからは毎年3人から5人の徒弟を受け入れ、技能、資格を取得させるため、ヘアダー社の工場で行っている。

毎年3人から5人くらいの徒弟を入れて、この技能、技術、資格を取ってもらえるようにうちの工場で行ってもらっています。うちの工場というのは、できるだけほとんどオートマチックな機械を使わず、なるべく手でというモットーで行っています。

(Giselheid Herder氏、2016年11月22日、Robert Herder 本社)

29) 剃刀も20世紀後半からゾーリンゲンで製造されている。

30) 前身の法律は1930年代にすでに存在していた。

31) https://www.capital.de/wirtschaft-politik/die-scharfmacher?article_onepage=true (2021年1月10日閲覧)

32) ロベルト・ヘアダー社社長のギーゼルハイド・ヘアダー氏はマイスター制の廃止について、「これはゾーリンゲンにとってもものすごくよくないことであった」(Giselheid Herder氏、2016年11月22日、Robert Herder 本社)と述懐している。

33) この背景には、1970年前後よりみられる若者達の価値観の多様化もあげられる。海道(2001)は、その際に、自己実現(Selbstverwirklichung)、共同体(Gemeinschaft)、創造性(Kreativität)、共同決定(Mitbestimmung)に重点が置かれ、これに伴い、「労働のモラル」や「消費のモラル」が分化してきていることを指摘する。

34) ギーゼルハイド・ヘアダー氏が社長に就任した当時、マイスターとして残っていたのは高齢の男性職人のみであった。1969年に職業訓練のプログラムが廃止されてから約1世代の空白が生まれてしまったことになる。

35) マイスター制度では、上記にもあるように一定期間の職業教育ならびに訓練が必要となり、これを経験した後にはマイスター試験に合格することでマイスターの資格を得ることができる。この職業教育や実習訓練を2年間に短縮させたのがゾーリンゲンのマイスター制度である。

また、職人をどこからどのように連れて来て、その人たちをどのようにして一人前の職人にするのかということが、最大の課題でもあった。しかも、コンセプトとして、鍛冶という仕事がきつい、汚いなどのイメージがあり、皆好んで仕事につきたいというものではなかった³⁶⁾。しかし、鍛冶の仕事ぶりを撮影したドキュメント映画が放映されたことにより、大きな反響を得ることができた。こうして、鍛冶志望の人々が集まり、2年間の職業訓練を実施することができた。ただ、2年間で一流の職人を育てるということは厳しく、6年間はかかるのが事実である。

時代は変わってもやはり良いものを。そして、映画では、ゾーリンゲンの困難な状況が示されるものの、職人の愚直な取り組みを通じて復活したという内容です。それを観て人々が感動して、本当に良いもの、本当に自分がやっていて意味のあるものをしたい、そういった気持ちというのはやはり昔から忘れられずにどこかにはあると思います。それを呼び起こしてまた人々はそういった気持ちをもって、ゾーリンゲンに来てくれたのではないかと私は思います。人間というのは、そういう気持ちがいつもるように私は思います。（Giselheid Herder氏、2016年11月22日、Robert Herder 本社）

ゾーリンゲンの代表的な刃物製造企業が、職人の後継者不足という課題を自社の問題だけでなく、ゾーリンゲンの産地全体の危機として捉え、行政などを巻き込みながら、真正面から取り組み、その結果として技能の継承を可能としたのである。

4. おわりに

本稿では、これまでわが国において、ほとんど論じられてこなかったイギリスのシェフィールドとドイツのゾーリンゲンの刃物産業に着目した。その基本的な情報、地理的、歴史的背景、実際の事例を通じて、シェフィールドならびにゾーリンゲンという刃物産地がどのようにして存続してきたのか、その一端を明らかにした。

この2つの産地の特徴と産地内の企業をつぶさに観察するといくつかの共通点がみえてくる。まず、大量生産によって成長を志向した企業の多くは、競争に敗れ、倒産や買収と

36) 「この社会一般に通じている考え方をどうやってイメージアップを図るかというのがものすごく大変でした」（Giselheid Herder氏、2016年11月22日、Robert Herder 本社）。

いう結果になっているということである。20世紀は大量生産の時代であった。大量生産システムは物質的な豊かさを実現したが、同時に労働者の格差問題や環境問題など、様々な問題ももたらした。現代の21世紀において、そのような20世紀の大量生産システムは、優位性を保てなくなっている可能性がある。

他方で、高級品を志向し、伝統的な手作りによる製造にこだわりを持ち、存続を志向した企業は、多くではないが、現代においても生き残っているという事実がある。これらの企業は同業者組合や商工会議所など、地域社会と密接につながり、職人を育成し、ネットワークを構築していることが示された。ピオリ=セーブル (Piore and Sabel, 1984) が「柔軟な専門化」として示したような、自立した小企業の地域的なネットワークによる生産システムが、今後の発展のカギとなるであろう。

また、既存資源を活かした関連分野への多角化展開も、経営環境の変化に対する生き残り戦略として、基本的に有効であることが刃物産業においても示された。今後、これらの発見事実をもとに、詳細な事例研究を増やしていくことにより、長期的な存続や衰退に関する研究が、さらに発展する可能性があると考えられる。

しかしながら、課題も山積する。例えば、産地内の後継の経営者による企業家活動については、サンプル数を増やした、より詳細な調査が必要である。また、経営戦略や組織構造、組織文化などといった視点からの理論的な考察も必要であろう。産地内では他社によって買収された企業も散見されるため、単独での生き残りではなく、多様な生き残り戦略が考察されなければならない。それらは今後の課題としたい。

参考文献

- Amatori, F. and C. Andrea. (2011) *Business History*, Routledge (西村成弘・伊藤建市訳『ビジネス・ヒストリー』ミネルヴァ書房、2014年)。
- Audretsch, D. B. and E. E. Lehmann. (2016) *The Seven Secrets of Germany: Economic Resilience in an Era of Global Turbulence*, Oxford University Press.
- Audretsch, D. B. (2015) *Everything in Its Place: Entrepreneurship and the Strategic Management of Cities, Regions, and States*, Oxford University Press.
- Bianka, K. (2020) *Unternehmensnachfolge in Kleinen und Mittelständischen Familienunternehmen aus Erbschaftsteuerlicher Sicht*, Hamburg.
- Chandler, A. D., Jr. (1990) *Scale and Scope: the Dynamics of Industrial Capitalism*, Cambridge, Mass. Belknap Press (安部悦生・川辺信雄・工藤章・西牟田祐二・日高千景・山口一臣訳『スケール・アンド・スコープ——経営力発展の国際比較——』有斐閣、1993年)。
- Ewing, J. (2014) *Germany's Economic Renaissance: Lessons for the United States*, Palgrave Macmillan.

- Fine, D. (2003) *Sheffield: History and Guide*, Tempus Publishing Ltd, Gloucestershire.
- Krause, M. and J. Putsch. (1994), *Schneidwarenindustrie in Europa: Reisen Zu den Werkstätten eines alten Gewerbes*, Rheinland-Verlag GmbH, Köln.
- Moore, S. (1999) *Cutlery for the Table: A History of British Table and Pocket Cutlery*, The Hallamshire Press, England.
- Parella, J. F. and G. C. Hernández. (2018) The German Business Model: The Role of the Mittelstand, *Journal of Management Policies and Practices*, 6(1), pp. 10-16.
- Piore, M. J. and C. F. Sabel. (1984) *The Second Industrial Divide: Possibility for Prosperity*, NY, Basic Books (山之内靖・永井浩一・石田あつみ訳、『第二の産業分水嶺』筑摩書房、1993年).
- Putsch, J. (2000) *Die Reihe Archibilder Solingen: Industriekultur 1880-1960*, Erfurt.
- Putsch, J. and M. Krause. (2018) *Tradition und Leidenschaft Schneidwarenindustrie in Europa*, Schriftenreihe des Fördervereins Industriemuseum Solingen e.V.
- Simon, H. (2010) *Hidden Champion in the 21st Century: The Success Strategy of Unknown World Market Leaders*, Springer (上田隆穂監訳・渡部典子訳『グローバルビジネスの隠れたチャンピオン企業——あの中堅企業はなぜ成功しているのか——』中央経済社、2012年).
- Tweeddale, G. (1993) *Stan Shaw, Master Cutler: The Story of Sheffield Craftsman*, The Hallamshire Press, England.

天野史子 (2009) 「立命館大学税法研究会——ドイツ相続贈与税法と資産取得課税について——」『立命館法学』第320号、pp. 318-421。

上野和彦 (2007) 『地場産業産地の革新』古今書院。

海道ノブチカ (2001) 『現代ドイツ経営学』森山書店。

熊澤喜章 (2002) 「シェフィールド鉄鋼業における同族企業」『明治大学社会科学研究所紀要』第41巻第1号、pp. 271-279。

チョーサー, G. 著、榊井迫夫訳『完訳カンタベリー物語 (上)』(改訂版) 岩波文庫、1995年。

日本貿易振興会・海外経済情報センター (1980) 『英国・シェフィールドの刃物 (金属洋食器) 産地』(海外地場産業調査、No. 79-1)、日本貿易振興会海外経済情報センター。

資料

〈シェフィールド関係資料〉

A Short History of Sheffield, Sheffield Libraries Archives and Information, Archives and Local Studies (<https://www.sheffield.gov.uk/home/libraries-archives/access-archives-local-studies-library/research-guides/history-sheffield>) (2021年2月20日最終閲覧)

Ernest Wright (<https://www.ernestwright.co.uk/>) (2021年2月20日最終閲覧)

History of the Cutlery Industry (<http://www.sheffieldcutlerymap.org.uk/history-of-the-cutlery-industry/>) (2021年2月20日最終閲覧)

Mercedes Benz (<https://www.myvan.com/en/craft-and-makers-en/mercedes-benz-sprinter-handcrafted-scissors/>) (2021年2月20日最終閲覧)

Museums Sheffield (<https://www.museums-sheffield.org.uk/>) (2021年2月20日最終閲覧)

Sheffield City Council (<https://www.sheffield.gov.uk/home/your-city-council/population-in-sheffield>) (2021年2月20日最終閲覧)

Sheffield's Population (<https://www.sheffield.gov.uk/home/your-city-council/population-in-sheffield>) (2021

年2月20日最終閲覧)。

Swann-Morton (<https://www.swann-morton.com/>) (2021年2月20日最終閲覧)

The Company of Cutlers in Hallamshire (<https://cutlers-hallamshire.org.uk/>) (2021年2月20日最終閲覧)

The Company of Cutlers in Hallamshire, Annual Review, 2018-2019.

The Master Cutler, 2020-2021 (<https://cutlers-hallamshire.org.uk/the-master-cutler-2020-2021/>) (2021年2月20日最終閲覧)

The Sheffield Cutlery Map (<http://www.sheffieldcutlerymap.org.uk/>) (2021年2月11日最終閲覧)

〈ゾーリング関係資料〉

Geschichte der Klingenstadt Solingen - ein Auszug (<https://messervertrieb-rottner.de/wissenswertes/geschichte-der-klingenstadt-solingen/>) (2021年1月11日最終閲覧)

Geschichte der Solinger Messer (<https://www.vergleich-aktuell.de/solinger-messer-geschichte-hersteller/>) (2021年1月10日最終閲覧)

Internet Shop Solingen (<http://www.schneidwaren-solingen.de/geschichte/Page1.htm?uid=210532317>) (2021年1月10日最終閲覧)

Wie die Messermacher aus Solingen überlebt haben (https://www.capital.de/wirtschaft-politik/die-scharfmacher?article_onepage=true) (2021年1月10日最終閲覧)

Wie Solingen die Klingenstadt wurde (<https://www.solinger-tageblatt.de/solingen/warum-stadt-solingen-auch-klingenstadt-genannt-wird-10018147.html>) (2021年1月11日最終閲覧)

Zweiten Weltkrieg (<https://www.boker.de/geschichte>) (2020年12月28日最終閲覧)

付記) 本稿は平成30年度～令和3年度 科学研究費・基盤研究 (C)「技能系老舗同族企業における事業・技能継承に関する研究」(課題番号18K01760) (代表者: 曾根秀一、分担者: 上野恭裕) の研究助成の成果の一部である。

—2021.2.24受稿—